

『地域研究のためのフィールド活用型現地語教育』

平成21年度派遣報告書

——インド・CSDS、ヒンディー語、派遣期間(H21. 9. 30-H22. 3. 23)——

平成20年入学
大学院アジア・アフリカ地域研究研究科
博士課程2回生
濱谷 真理子

研究テーマについて

本研究の目的は、北インドのヒンドゥー巡礼地で暮らす女性修行者「サードヴィー」が、どのように生きる場と自己を構築していくのかを、フィールドワークと民族誌記述を通じて明らかにすることにある。

従来の研究では、サドゥ（男性行者）の苦行実践や隠遁・放浪生活について記述や議論がなされてきた一方、マイノリティであるサードヴィーには長らく光があてられてこなかった。それに対し、本研究では、サードヴィーのケアの世界の広がりに着目し、さらに、調理や洗濯、掃除、人人とのおしゃべりなど日常的なケアの営みを通じて、既存の社会を離脱し、巡礼地で暮らす彼女たちが、どのようにオルタナティブな生きる場と「マター（母）」として生きる自己を構築していくのか、そのプロセスを明らかにすることをめざす。また、サードヴィーがさまざまな日常的ケアを、セーワー（奉仕）として行なうこと、あるいは地域住民によるサードヴィーへのセーワーを受けていることから、特に、ヒンドゥーの社会文化に根付いている「セーワー（奉仕）」の理念と実践に焦点を当てる。すなわち、それがどのように狭い意味での「修行」だけではない修行実践の一環を構成するものであるのか、セーワー実践を通じてどのように他者とのあいだに自他関係がつけられるのかという問題を、セーワー実践を媒介とするつながり（ネットワーク）という視点から考えていきたい。

研修言語の概要

ヒンディー語は、インド共和国において公用語とされており、ウッタラーカンド州などの北インドでは、地域による若干の方言の差異はあるものの、多くの人びとに用いられている言語である。ヒンディー語の母語人口は約2億人と推定される¹。さらにヒンディー語を母語としない人たちのあいだでもヒンディー語は広く理解されており、私が研究対象とする、出身や母語がばらばらなサドゥ・サードヴィーにとっての共通語でもある。

語学研修の内容について

今回の語学研修では、前半の3ヶ月強を文法や読み書き能力の強化に専念し、後半の2ヶ月半ほどを、

¹ 田中俊雄・町田和彦著. 2003. 『CD エクスプレス・ヒンディー語』白水社.

調査地でのヒンディー語によるコミュニケーションの実践にあてた。

前半は、ワーラーナシ（UP州）で、計3人の先生について、ヒンディー語を勉強した。そのうちの一人の先生の自宅に2ヶ月ほど住ませてもらいながら、一日2時間ほど、会話の練習をしたり、マハーバーラタを読むなどして、ヒンディー語の授業を続けた。授業のない時間は、近くに住むサドゥ・サドヴィーのもとをたずねて話をしたり、アーシュラム（道場）や寺院をたずねたりして過ごした。BHU（バナーラス・ヒンドゥー大学）が近所にあり、そこに通う学生や先生などとも交流をもつことができた。

後半は、クンプ・メラー（祭）の開かれるハリドワール（ウッタラーカンド州）へ移り、地域のアーシュラムやサドゥたちの集住するキャンプを訪ねて、サドヴィーたちに現在の生活スタイルや人間関係、出家した経緯など、話を聞いてまわった。そのうちの何人かとは、グル・シッシャ（師弟）関係を結ぶ、アーシュラムで共同生活をするなど、親しい関係を築くことができた。また、サドヴィーのバクタ（信者）たちや、地域の人びとなどとも積極的に交流をもつように努力した。

研修期間中に印象に残った経験

言葉は切実な問題だ。そんな、当たり前のようなことを、改めて実感させられたのは、サドヴィーのウマとの一件だった。ウマとは2009年の5月に、ヒマーラヤ高地の巡礼地バドリーナートでであり、今回偶然ハリドワールで再会した。「あんたヒンディー語ができるようになったね」と声をかけられたのがきっかけで、彼女と一週間ほど行動をともにするようになった。そのあいだ、ウマは私に死んだ夫のこと、故郷のこと、現在の恋人のことなど、さまざまな話をしてくれたのだが、そのとき、前回話してくれたことはすべて嘘だったことがわかった。それだけではなく、彼女はいまでもなお私に対して嘘をつき続けていることを白状し、ほんとうのことをいうことはできない、といったのだ。「あんたはヒンディー語をまだ全部はわかっていないから」という理由で。

嘘にせよほんとうにせよ、それをわからせてくれただけでも、言葉の切実さを思い知った。

目標の達成度・反省点

今回のITP派遣における私の目的は、今後のフィールドワークに必要なヒンディー語能力の地盤を身につけることと、より広くは、インド・ヒンドゥーの宗教文化を、現地で生活することで、生活感覚として学ぶということであった。ヒンディー語にかんしては、これからなんとか調査をやっていけそうだという感触と、そしてこれでようやく研究の入り口に立てるという糸口を、つかむことができた。また、クンプメラーという、ハリドワールでは12年ぶりの大きな祭の場に初めて立ち会えたことは、個人的にも研究においても貴重な経験であった。

反省点としては、派遣期間の後半、コミュニケーションの実践に努めた一方、読み書きの勉強がおろそかになってしまったことである。研究及び修行実践のうえで必要なヒンディー語文献を読むために、会話と読み書きの勉強を併行して継続することと、さらに、サンスクリット語を勉強することが、今後の課題である。



図 1 ヒンディー語の授業風景



図 2 クンブメラーにおける出家儀礼



図 3 マーイーワラー (アーシュラム) の人びと